

# 椎塚貝塚における山形土偶の多様性

吉岡 卓真

はじめに

山形土偶とは、頭部の形状が山形ないし三角形をした、縄文時代後期中葉の関東地方、特に現在の霞ヶ浦から印旛沼周辺地域を中心に分布する土偶のことである。本論で紹介する資料の出土地、椎塚貝塚は古くから山形土偶を多量に出土する遺跡の一つとして知られている。

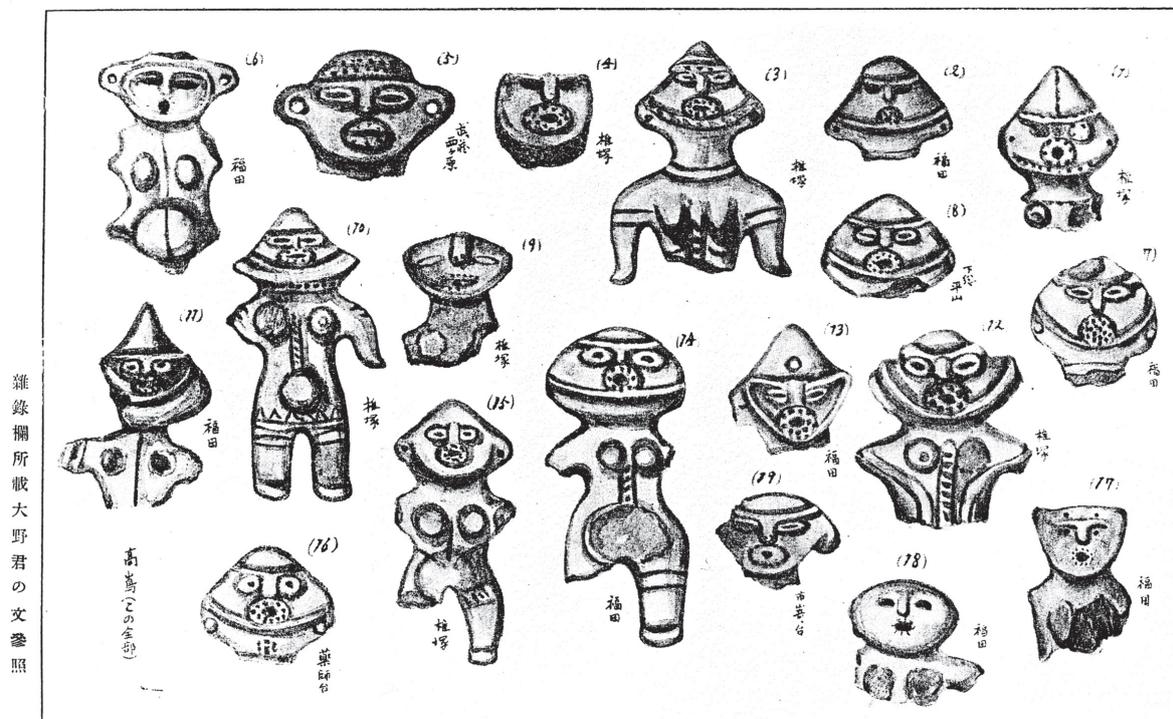
ところで、椎塚貝塚をはじめとする土偶多量出土遺跡における山形土偶のすべての頭部形状が山形ないし三角形をしているわけではない。数は少ないものの、異なる頭部形状を持つ資料も存在する。これまで、こうした異なる頭部形状を持つ土偶の研究は、典型的な山形土偶を対象とした研究に比べて少なく、その実態は不明な部分が多い。とはいえ、典型的な資料のみでいくら研究を進めたところで、当該期における土偶多量出土遺跡出現の背景とその実態を明らかにすることは難しいだろう。

本論では、従来脚光を浴びることが少なかった資料に焦点をあて、典型的な山形土偶と比較検討を行い、その特徴の一端を明らかにしたい。

## 1. 黎明期の山形土偶研究

今回扱う二者は厳密な定義によれば、一方は山形土偶であるが、もう一方は頭頂部が平坦であり、決して“山形”土偶とは呼べない資料である。だが両者にはよく似た特徴も見られる。

(一第) 圖 偶 土 面 黥



雑録欄所載大野君の文参照

Clay Human Figures of Stone Age with Tattoo-like Markings on their Faces.

第1図 黎明期の土偶研究〔大野 1910〕

本資料の存在が広く知られるようになったのは、今からおよそ100年前のことである〔大野1910〕。当時、型式学的位置づけはおろか山形土偶としての分類すら無かった時期に、口に入れ墨表現を伴う一群として報告された（第1図3、4）。ここで興味深いのは、これらのまとまりが口に刺突を持つ土偶として集められたにも関わらず、その多くが現在の山形土偶に分類されるまとまりを示している点である。もちろん頭部形状や目、口といった細部の属性を個々に比較すれば、若干のバリエーションを確認することができる。現在の山形土偶の定義や分類は、頭部形状のみでなされているわけではなく、様々な属性が加味されており、個々の頭部形状や顔面部の表現は実に多様である。その背景には、こうした山形土偶としての分類以前に行われた研究が、現在の分類に少なからず影響を与えている可能性がある。その後、3は山形土偶の典型例として多くの図版に登場するが、4はあまり注目されることもなく現在に至る。

## 2. 椎塚貝塚出土の山形土偶の特徴

第2図1は頭部から胸部上半まで残存した資料で、縄文を施文せず沈線による装飾を基調とする。本資料は頭部形状の他に突出した乳房の表現など、山形土偶としての諸特徴を伴う代表的な資料である。頭部は頭頂部に向かってすぼまる三角形状をなす。

顔面部は、あらかじめ平坦な面を作出した後、押捺を伴う隆帯により、直線的な眉と弧状の顎が表現され、その後、目、鼻、口の各パーツを貼り付ける。目は、鼻と眉状の隆帯に接して押捺を伴う横楕円形の粘土を貼り付け、口は顎状の隆帯に接して中心を凹ませ、周囲に竹管状工具による押捺を施す円形の粘土貼り付けで表現される。一方の耳部は顎状の隆帯の両端下側に、竹管状工具による押捺で表現される。側面から見ると、正面側は平坦な面に顔面を構成する各パーツを貼り付けていることがわかる。そして後頭部には円形の瘤を貼り付け、さらにその瘤を囲むように円形の沈線を描き、その後、十字状の沈線文様を施文する。

第2図2は頭部のみ資料である。沈線と竹管状工具による装飾を基調とする。本資料は頭頂部と後頭部が平坦で、なおかつ耳の表現を伴わず、形態的に1と大きく異なる。



第2図 椎塚貝塚出土の山形土偶

後頭部が平坦で、なおかつ耳の表現を伴わず、形態的に1と大きく異なる。

顔面部は鼻を貼り付けた後、目を貼り付けるが、両目とも剥落している。剥落痕跡から推測すると1と同じ横楕円形の貼り付けであろう。口は顎に接して1と似た貼り付けで表現される。なお、顎の表現は1が弧状の隆帯であるのに対して、本資料は顔面部の成形段階で顎を張りだすように作り出しており、成形方法が異なる。顎の下から側面にかけて口の周囲と同じ竹管状工具による押捺

を密に施す。そして後頭部には瘤を貼り付けず平坦な作りで、そこに1と同じ楕円形と十字の沈線文様を施文する。

次に両者の頭部を中心とした型式学的な共通点と相違点について確認しよう。

### 3. 両土偶の型式学的検討

まず両者の大きな違いとして頭部形状があり、さらに2は耳の表現がなく、側面部も1のように平板化せず、厚みのある形態となる。そして両者の顎の表現に着目すると、1は平坦な面を作出した後、隆帯を貼り付けて表現されるのに対して、2は成形段階ですでに顎を前方に突出させた起伏のある作りをしている。また後頭部においても1には多くの山形土偶に見られる円形の瘤を伴う一方、2は瘤を貼り付けず平坦な作りとなる。

その一方で、細部においてはいくつか共通点も見られる。まず口の表現は、ともに中心を凹ませた円形の貼り付けで、周囲に竹管状工具による押捺を施す。そして後頭部において丸十字の文様を施文するが、ともに円文ないし楕円文を描いた後、十字を描き、その十字も先に横線を描いた後に縦線を描いており、施文順序も細部に至るまで共通する。こうした後頭部の文様は、1のような典型的な山形土偶の中でもそれほど多く描かれる文様ではなく、それが見た目の異なる2にも見られる点は、両者の土偶製作環境を考える上で興味深い。

さて両者の時間的な前後関係について、土器との共伴関係による出土状況からの検討は難しく、型式学的な分析に頼らざるを得ないが、結論から言うと、両者の関係は一時期におけるバラエティーを示すと考えられる。両者の細別型式による時間差については今後の検討に譲るとして、少なくとも両者には口の貼り付けや後頭部文様など細部の属性において共通点が見られる。特に口の周囲に押捺された竹管状工具による装飾は、その後のミミズク土偶への変化の過程で、円形の小刺突へ変化しており、時期的限定性を示す文様装飾である。

ここで興味深いのは、形態上大きく異なる両者が、細部において若干の共通点を保有しつつ、一遺跡内で共存する点である。こうした異なる形状の土偶が共存する背景について、それを使用する祭祀形態の違いを反映しているのか、それとも同質の祭祀でありながら、製作する集団や個人間の差異を表現したものなのか、周辺遺跡における土偶保有状況との比較検討を通じて、その実態を明らかにしていくことが重要である。

それにしても一遺跡内において、外見や成形方法の異なる土偶が併存するという事実は、その後の土偶形態の多様性を考えていくうえで重要な事実である。

### 4. ミミズク土偶の様相

さて、山形土偶の頭部形態の中に、頭頂部が平坦な資料の存在を指摘したが、その存在は系統的变化を伴う資料なのか、それとも系統性を持たず偶発的に製作されたものなのか、その後の変遷について明らかにする必要がある。そのためにまずは後続するミミズク土偶の様相についてふれておこう。最近、古手のミミズク土偶について、頭頂部が平坦な一群を“余山系列”として抽出し、その様相と変遷について論じられた論考がある〔上野 2009〕。その代表例が第3図であり、右腕と右脚、そして頭部を部分的に欠損するものの、全体の様相を把握することのできる資料である。本資料の時期を推定する手掛かりとして腕や脚の縄文施文部は隆起しており、後期後葉の安行式土器の口頸部に見られ

る帯縄文と同様の型式学的特徴を見いだすことができる。

現時点において、余山系列がいつの時期から始まるのか詳細は明らかにされていない。しかしながら、頭頂部が平坦な資料は、その後のミミズク土偶の中で、山形土偶と同じ分布地域内に多く存在しており、しかもその影響は晩期前葉まで確認できることから、安定した変遷を伴う一群であると思われる。そしてその始まりについて考えた場合、初期ミミズク土偶の時期に登場すると考えるよりも、第2図2の山形土偶の時期にはすでに平坦な頭頂部を持つ土偶が存在しており、その起源はより古く遡る可能性がある。



第3図 余山貝塚出土のミミズク土偶  
(辰馬考古資料館所蔵)

## 5. 山形土偶からミミズク土偶へ

関東地方の後期中葉を代表する土偶として、山形土偶の位置づけが定着してから長い歴史を有し、一見安定した存在に見えるものの、本論で指摘した頭部形状も含めて、一言でまとめられるほどその実態は単純ではない。近年の山形土偶研究において、そうした点を踏まえ一遺跡内における土偶保有状況に多層的な製作技術と祭祀形態の存在を指摘した研究があり、当該期における土偶多量出土遺跡出現の背景とその実態を考える上で重要な視点が提供された〔阿部 2007〕。

本論では山形土偶の中に頭頂部が平坦になる資料の存在を見出し、それが古手のミミズク土偶に見られる同様の頭頂部形態を有する一群の遡源となる可能性を指摘した。なお、ミミズク土偶の時期には、頭部形状の異なる資料が一遺跡内で共存する状況を確認できるが、椎塚貝塚では山形土偶の時期にすでにそうした保有状況を確認できる。したがって、一遺跡内で異なる頭部形状が共存する状況は、少なくとも後期中葉まで遡る可能性が指摘できよう。

今後は、各遺跡の土偶製作技術や土偶多量出土遺跡出現の背景とその実態の解明にむけて、山形土偶における頭部やその他の部位も含めた形態について、そのバラエティーの詳細を遺跡単位で把握し、各土偶形態の型式学的な分析とともに遺跡内における保有状況を明らかにしていきたい。

### 【引用・参考文献】

阿部 芳郎 2007 「山形土偶の型式と地域社会 ― 土偶の型式と技術にみる多層構造 ―」『縄文時代』第18号, pp. 83～105

上野 修一 2009 「余山系列ミミズク土偶の成立と変遷」『野州考古学論攷』, pp. 227～246

上野 修一 2010 「山形土偶の成立とその変遷」『日本の美術』No. 527, ぎょうせい, pp. 82～93

上野 修一・森嶋 秀一 2011 『土偶の世界 ― 縄文人のこころ ―』第101回企画展, 栃木県立博物館

大野 雲外 1910 「鯨面土偶に就て」『東京人類学会雑誌』第26巻 第297号, 東京人類学会 pp. 109～111

小野美代子 1981 「加曾利B式期の土偶について」『土曜考古』第4号, pp. 1～6

瓦吹 堅 1990 「山形土偶」『季刊考古学』第30号, 雄山閣, pp. 32～33